

こうした点において、山田の聖地行は現代の宗教ツーリズムとは大きく異なっており、文明主義的ツーリズムと呼べるような性格を備えていたと言える。過去を甘美なものとしてではなく、社会進化の段階で克服されてきたものとする文明主義的ツーリズムにおいては、パレスチナもローマも原理的に値する場所ではなく、期待をもって訪れられる場所ではなかった。それは近代社会の思想的支柱としてのプロテスタンティズムによってすでに乗り越えられた過去の文明の停滞した景色に過ぎなかったものであり、山田の聖地行においては、過去の痕跡ではなく、未来の予兆こそが聖地に探し求められたと考えられるのである。

内村鑑三の神名解釈

渡部 和隆

内村鑑三の聖書解釈は救済史的な枠組みを有しており、その分析のためには内村が救済史の主体である神をどのように把握していたかを明らかにする必要がある。本発表はこの問題を解くための手がかりとして内村鑑三の神名解釈、すなわち出エジプト記三章一四節の「在りて在る者」の解釈を分析する。使うテキストは『出埃及記講義』（全集二二巻）と『モーセの十誡』（全集二五巻）との二つである。

『出埃及記講義』では、内村は神名から二つの解釈を引き出す。一つは「永遠の実在者」「永遠のアーメン」（全集二二巻、二八四頁）、すなわち神名は宇宙の創造主にして全能者という神の本質を表しているという解釈であり、もう一つは「恵を己

に湛へて他に俟たざる実在者」（同上、二九〇頁）、すなわち人間との関係にあつて人間に対して恩恵をもって臨むという神の態度を表しているという解釈である。そして、後者の内容は新約聖書におけるイエス・キリストの啓示で表されているものと連続していると解釈されている。

『モーセの十誡』では、内村は当時の聖書学に倣って神名に生成の意味を読み込み、「在らんとする者」として在らんとする者」（全集二五巻、一五八頁）と訳し直す。その上で内村は神が生成するということを、真理と恩寵との啓示が歴史的な時間の中で次々とより強い強度で人間にもたらされ続けることだと解釈する。

つまり「エホバは永久に『在らんとする者』である、今日のエホバは明日のエホバではない、明日は今日よりも更に大にして貴く、明年は今年よりも更に大にして貴く、斯くて十年又百年、永遠に亘り限なき真理と恩寵とを人類に現示し給ふ者である」から「アダムに現はれしよりもノアに至て更に深く己を顕はし、アブラハムには更に貴く、モーセには更に大に、イザヤ、エレミヤ、ダニエル等には更に明かに、而してイエスキリストに於て一度び完全に現はれ給うた、而も人の之を認むる能はざるや又使徒等を通して更に遠大なる約束を我等に遺し給うたのである。」（同上、一五九頁）というわけである。かくして内村は神名に生成の意味を読み込むことにより聖書中のさまざまな登場人物を連続性の相の下で把握するに至った。彼らはいわば神の啓示のグラデーションとも呼ぶべき関係にある。聖書の各々の書は神の啓示のグラデーションとして連結され、イエス・キリストという個体において最も純粋な強度の啓示に至

るといふ、一つの神の啓示と行為との歴史をなす。先述したキリストとの連続性がより包括的になり、聖書は内部に強度の差異を包含しつつ、全体としてはイエス・キリストという統一性を維持することとなる。つまり、内村が生成としての神名において把握していたのは、歴史的な時間の中にグラデーシジョンのように生成してくる神であり、その生成の内に人間の救済に関わる啓示と恩寵とを与え続けてくれる神だったのである。

ここから以下のように考えられる。救済史の主体である神の行為は啓示のグラデーシジョンとしてアダムから使徒たちに至るまでの聖書の記事全てを連続的に貫き、イエス・キリストにおいて最も純粹な強度の啓示に達する。逆に言えば、聖書の各書や各々の登場人物における啓示は、強度が弱いにしても、イエス・キリストの啓示との同一性ないしは連続性を有する。聖書はその内部に強度の差異と全体的な統一性を持つこととなり、イエス・キリストとの同一性と不純物である他性との二重性において把握されることとなる。啓示のグラデーシジョンにより、微弱だが、しかし確かなイエス・キリストの働きが聖書全てに見出される。神名解釈の中に含まれていた生成する神という觀念がこのグラデーシジョンを可能とする。したがって内村の救済史的な聖書解釈を支えているのは神の啓示のグラデーシジョンであり、その根拠の一つとして神名の解釈があったと結論づけられる。

矢内原忠雄と新渡戸稲造——人間への眼差し——

森上 優子

本報告は、近代日本のキリスト者である矢内原忠雄（一八九三—一九六一）とその師である新渡戸稲造（一九六二—一九三三）を取り上げて、両者の「人間への眼差し」（人間観）の一端を明らかにしようとするものである。「人間への眼差し」は、彼らの活動を支えた思想としてとりわけ重要であると考えられる。

はじめに、矢内原の理想とする人間像をみてみよう。彼は人間の育成に際して「品性」を重視する。彼は「品性」を「個別的であり、人格が個々の人によって具体的な道徳的性格を帯びたもの」（「人間形成について」『矢内原忠雄全集』二十一巻）と規定する。彼がこのように「人格」を尊重する根底には、人間に「道徳的生命力」が内在するという理解があり、その源泉には「宗教」の存在があった。彼にとって、「宗教」とはまさしくキリスト教の意であり、「道徳的生命力」とはキリスト教倫理を指すものであると考えられる。ここに、彼のキリスト教信仰の反映を読みとることができであろう。矢内原は、教育を「人間を作り直すこと」といい、自己存在の根本に神との関係性を認識する人間、別言すれば、信仰に生きる人間の育成と捉えたのである。

さて、矢内原の信仰は、日本の民主化に対して独自の理解を与えるものであった。「日本の民主化が可能であるかという問題は、日本国民がキリスト教を受け入れるか、キリストを信ずることができるかということと、同じ問題なのです」（『日本の民主化は可能であるか』『矢内原忠雄全集』二十巻）。このよう